

A History of Language

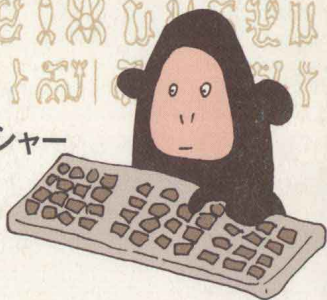
STEVEN ROGER FISCHER is Director of the Institute of Polynesian Languages and Literatures in Auckland, New Zealand. The decipherer of Easter Island's rongorongo script and of the Cretan Phaistos Disk, he is the author of *Glyph-breaker* (1997).

Steven Roger Fischer

スティーヴン・ロジャー・フィッシャー

Sho Suzuki

鈴木 晶 [訳]



アリのことばから
インターネットのことばまで

ことばの 歴史

A History of Language

STEVEN ROGER FISCHER is Director of the Institute of Polynesian Languages and Literatures in Auckland, New Zealand.
The decipherer of Easter Island's rongorongo script and of the Cretan Phaistos Disk, he is the author of *Glyph-breaker* (1997).

Steven Roger Fischer

スティーヴン・ロジャー・フィッツシャー

Sho Suzuki

鈴木 晶 [訳]



アリのことばから
インターネットのことばまで

ことばの
歴史

研究社

A History of Language

by Steven Roger Fischer

Published by Reaktion Books Ltd.

First published 1999

Copyright © Steven Roger Fischer, 1999

All rights reserved.

日本版翻訳権所有
研究社

ステイヴン・ロジャー・フィッシャー
UCLAで博士号取得。子供の頃、沖縄で暮
らす。現在、ニュージーランド在住。ポリネ
シア言語文化研究所所長。イースター島のロ
ンゴロンゴ、クレタ島のフェイストスの円盤
など、未解読文字研究の第一人者。

鈴木晶（すずき・しょう）

法政大学国際文化学部教授。翻訳家。『愛す
ること』(紀伊國屋書店)、『死ぬ瞬間』
(中公文庫)など、訳書多数。舞踏評論家と
しての著作『パレエの魔力』(講談社現代新
書)なども数多くある。

この本の歴史

A History of Language

初版第一刷印刷

二〇〇一年七月二日

初版第一刷発行

二〇〇一年七月一日

著者

ステイヴン・ロジャー・フィッシャー

訳者

鈴木 晶

発行者

池上勝之

発行所

株式会社 研究社

東京都千代田区富士見二一十一三

電話 〇三 (三二八八) 七七五

FAX 〇三 (三二八八) 七八三二

振替 〇〇一五〇一九一二六七一〇

装幀

清水良洋

装画

佐の佳子

印刷所

研究社印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。定価はカバーに表示してあります。

<http://www.kenkyusha.co.jp>

ISBN4-327-40125-0 C3080

Printed in Japan

目次

はじめに 7

第一章 動物のコミュニケーションと「言語」 11

第二章 話をするサル 47

第三章 最初の語族 81

第四章 文字 115

第五章 言語の系統 155

第六章 言語の科学に向けて 193

第七章 社会と言語 237

第八章 言語の未来 283

訳者あとがき 309

引用文献 311

精選参考文献 327

索引 340

ことばの歴史

はじめに

本書は言語の歴史への入門書である。狙いは、言語の歴史というテーマをその最も広い意味で扱い、外国語や言語研究についてはごく常識的なことしか知らないという人に、専門的な言語学教育への準備をさせることである。その意味で、本書は、大学や専門学校で、言語学入門とか言語学概論といった講座を受ける前に、予習として読むのに最適な一冊である。本書を読むのに、言語学の素養はいつさい必要ないし、言語学特有の専門用語や言語学独特の方法論をあらかじめ知っている必要もまったくない。

一般に言語の歴史というと、現在われわれが使っている言語や昔に使われていた言語など、人間の使うことばがいかなる言語学的変遷を経てきたかについて、図式的に述べたものであるが、本書はそうした従来の言語の歴史とはおよそ違う。というのも本書は、人類という枠を超えて動物の言語にも言及し、グローバルな意味での「言語」の歴史的意義をわかりやすくまとめたものである。第一章は自然界や太古の話から始まり、最終章は科学技術や未来の話で終わる。また、そうした

歴史的な流れを説明する際に、話題はマクロからミクロへと展開していく。たとえば、動物全体の言語の話から始めて、最後はとくに霊長類の言語の話題を取り上げるとか、ホモ・サピエンス全般の言語から大語族へと主題を展開するとか、あるいは、特定の語族から始めて、しだいに、新たなグローバル社会における言語の利用や、未来の人類が太陽系に移住を始める時代に英語はどうなっているだろうかという可能性について語る、といった具合である。つまりこれは言語という、自然界で最も魅力ある機能を主役にした、平凡であると同時に奇想天外なる物語である。

「言語」という曖昧模糊とした語には二〇以上の異なる定義がある。場合によってはさらに多くの比喩的な意味がある。言語がいかに多くの側面をもっているかについては、言語の変化発展史の入門書である本書を読みすすむうちに、おのずと明らかになるだろう。じつは現在の公式の「言語」の定義にすら意味的な変化が起こっていて、「言語」はもはやホモ・サピエンスだけの特権とはいえなくなっている。現在では、どんな時代のどんな生物でも、他の動物に情報を伝えるなんらかの手段を使うものはすべてなんらかの「言語」を使っているとされている。どうやら言語は万物に共通の機能であるらしいのである。

「どこかで、誰かが、最初にことばをしゃべった。そして、他の誰かが理解した」などという主張は馬鹿げている。ひょっとしたら現代では、これもしゃれた物言いとして好まれるのかもしれないが、あらためて言うまでもなく、このメッセージには歴史的裏付けはない。言語は「始まった」のではない。何億年という歳月の中で、さまざまな形を取りながら、徐々に発展してきたのである。この延々と続いた進化の最後によりやく、現代人がそれと認めることができ、理解できるような形

の「言語」(これは本質的には擬人的概念である)が出現したのである。

したがって、一九六〇年以来、鳥類、クジラ類、霊長類を対象とした草分け的な実験でとくに明らかになってきたように、言語の歴史には人間以外の動物の言語も含まれるべきである。言語の原始形態は今もなお世界中に存在しているが、そのことはまさに今明らかになりつつある。これはひとえに、高性能モニター装置を利用して、これまで自然界に知られていなかったコミュニケーションを記録するという、現代科学技術の成果である。

ヒト科の動物も、早くから、話をする生き物になった。本書の中心テーマは、そうした人類の言語の出現とその後の発展である。人類の言語をめぐる重大な疑問に対する明確な答えは、どこを探しても残されていない。「言語」とは何か? 「言語」は他の知的能力といかなる関係にあるのか? 人類の言語は非人類のコミュニケーションとどう違うのか? ——言語の歴史を学ぶ目的のひとつは、これらの疑問やこれと似た疑問に、答える方法を見つけることにほかならない。

本書は、言語の発展について、理論的なことは詳しく述べていない。この本はふつうより広い範囲でとらえた言語の歴史であるから、理論的なことは全体的なあらましだけ紹介するにとどめる。「語」の起源や、統語法その他の出現など、特定の論争に関して詳しく知りたい読者は、巻末の「引用文献」と「精選参考文献」を活用されたい。人類の頭脳がどう発達し、どのようにして特定の音声指示を処理できるようになったかという問題も、同じく興味深いテーマであるが、残念ながら言語の歴史の入門書である本書の及ばないところである。

本書の執筆を勧めてくれたのはジェレミー・ブラックである。彼のアイディアや無類の支援には心から感謝している。リアクション・ブックス社のマイケル・リーマンには、企画についての綿密な打ち合わせに快くお付き合ひいただき、建設的な批評や提案を数多くたまわったことに対し、御礼申し上げる。

また、これまで私が専門的に言語学や文献学を研究するにあたって、それぞれに重要な役割を果たしてきた多くの方々にも、衷心より御礼申し上げたい。過去三〇年間にわたって、私はこうした方々の言語学や文献学の深い学識に感化されながら、自分なりの言語学的知識や信念を形成してきた。名を挙げるべき多くの方々の中から、とくにお世話になった、エリ・ソーバー（故人）、ノーム・チョムスキー、ライモ・アンティラ、テオ・ヴェネマン、テレンス・ウィルバー、ステイヴン・シュウォーツ、アーサー・グロウス、トマス・バーセル（故人）、H・G・A・ヒューズ、マーガレット・オーベル、ブルース・ビッグズ、アンドルー・ポリー、マルコム・ロス、ロス・クラーク、レイ・ハロウ、テリー・クロリー、アルバート・シュッツ、ジョン・シャロツト、ジャック・ウオードに感謝を申し上げたい。

さらに、われわれみんなに対し、言語についてどう書くべきかを示してくれたジーン・エイチスンにも、とくに御礼申し上げる。また、妻ターキは、とりわけ私を支え、光明をともしてくれた。

一九九九年一月 ニュージーランド、ワイヘケ島にて

ステイヴン・ロジャール・フィッシュャー

第一章 動物のコミュニケーションと「言語」

地上で最も早く出現した生物は、種や性別や意思などの情報を交換するための原始的な仕組みを編み出した。そうした情報伝達は化学的コミュニケーションを通して行なわれたのである。これは当時の自然界では最も高度な手段であった。生物が子孫を残すためには、自分と同じように進化している別の個体と接触しなければならぬが、そうした必要が何百万年も続くうちに、もっと複雑なコミュニケーションが必要になった。そしてその進化の過程で、最も広義の「言語」が生まれた。自然界で使われている言語の型は多種多様である。どの種のコミュニケーション能力も、詳しく調べれば調べるほど、他とは違うことがわかり、「言語」という概念をさらに複雑に定義することが必要になる。

最も単純な定義によれば、言語とは「情報交換の媒体」である。この定義に従えば、顔の表情、身ぶり手ぶり、態度、口笛、手を使った合図、文字、数学的言語、プログラム言語（コンピュータ言語）などもすべて言語の概念に含まれる。また、この定義に従えば、アリの化学的「言語」やミ

ツバチのダンス「言語」も含まれる（ちなみに現在では、どちらの昆虫も、そうした言語だけでなく別のコミュニケーション表現形態をも使っていることが判明している）。

さらに、この定義に従えば、人間には聞こえない周波数で出される数多くの生体音響的な情報交換（つまり生物が音を出すこと）も言語だということになる。たとえば、平均的な一五歳の人間には、普通の会話の声の大きさや相手との距離においては、およそ一〇オクターブ——すなわち三〇〇〜一万八〇〇〇ヘルツ（一秒間の振動回数）——の音しか聞こえない。鳥類、カエルやヒキガエル類、イヌなどもすべてこの範囲内で音を出す。しかし、他の生物のほとんどは、人間が「正常」とみなす範囲より低い振動数や高い振動数でコミュニケーションをとっているらしい。超低周波音とは三〇ヘルツ以下で発せられる音のことで、たとえば、ナガスクジラ、シロナガスクジラ、ゾウ、ワニなどが出す音、あるいは、海洋の波、火山、地震、悪天候などが生む音の多くがこれにあたる。超音波は周波数が一万八〇〇〇ヘルツを超えるもので、一般に、昆虫（これが地上で最も生息数の多い動物である）、コウモリ、イルカ、トガリネズミなどが使っている周波数がこれにあたる。しかし、言語には音声コミュニケーションだけでなく、もっとずっと多くのものがある。最も普遍的な意味での言語とは動物世界の絆のことであって、言語かどうかの境界は人間が勝手に線引きしているにすぎないともいえるのである。

最近の動物コミュニケーション研究は、種全体の記述に焦点をおき、動物のコミュニケーションを、一方では基礎生物学のプロセスと、他方では特異な社会的プロセスと関連づけて考えるようになってきている。^{☆1}二十一世紀初頭の現在、「ことばの歴史」といえば、それはまだ暗黙のうちに「人

類の言語の歴史」であるが、じきに、これまで思いもよらなかった多くの言語形態を含むようになるかもしれない。というのも、たとえばここ数年、多くの両生類、とくにカエルの音声コミュニケーションが徹底的に研究されている（もつとも、まだ「カエル言語」に関する記述を探しても無駄だが）。また、生体音響学では魚類にも注意を払うようになってきた。というのも、魚類の多くはとりわけ産卵期に、典型的な「複合音」を発するからである。その複合音の前半はゆつたりとした波動の列、後半はすばやい反復を繰り返す波動からなり、これらが部分的に重なり合って「音声」に似た一定の波形を作り出している。

たとえば、最も原始的な形の音声コミュニケーションの一例は、アメリカ合衆国西海岸に生息する、「ブーン」という音を出す「ミッドシップマン・フィッシュ」【バトラコイデス科の魚】である。この魚が夜間に発する「ブーンという音」は、最近になって、カリフォルニアの住居用ヨットに住む人々に迷惑がられ、国際的な話題になったが、それまで学界には知られていなかった。雄のミッドシップマン・フィッシュは「ブーンという音」で雌をおびき寄せ、自分の巣に産卵させる。その音はオーストラリア原住民の管楽器ディジャリドの音にそっくりなブーンという大音響だが、これはこの魚の浮き袋にくっついていて一対の筋肉から出ている。この筋肉が収縮して胃壁を振動させ、一時間ものあいだ動き続ける。だが、ひとたび雌がやってくると「ブーンという音」はすぐに止む。

昆虫の中にも、明らかにコミュニケーションに使われる発音器官を持っているものが何種かある。その多くは超音波を使っているのだが、そのようなものが存在しようとは、二十世紀後半になるま

で学界でも知られていなかった。たとえば求愛中の蛾は、雄も雌もフェロモン（特殊な腺から出る分泌液）によってコミュニケーションするが、蛾の求愛行動の全過程を通じて、超音波も発せられているということがごく最近わかった。そのため現在では、複数のコミュニケーション方法の間の相互作用ということに焦点を当てて、蛾の求愛行動を再考することが必要となってきた。

しかし、動物のコミュニケーションあるいは「言語」といったとき、まず頭に浮かぶのは、アリ、ミツバチ、鳥、ウマ、ゾウ、クジラ、類人猿などの言語であろう。

アリ

アリの種類は一万二〇〇〇から一万四〇〇〇種を数え、各コロニーは一〇〇万以上の個体から成る。アリは地球上の居住可能な場所のほとんどどこにでも住み、その数は人類の数兆倍である。単体で暮らすアリはない。ということはつまり、どのアリも何らかの方法でコミュニケーションをとっている。どのアリも、身体言語とフェロモンを使って、少なくとも五〇の異なるメッセージを伝えることができる。大顎腺から警報のための臭い物質を分泌したり、後腸の最後のところにある直腸腺から道しるべのための臭いを出したり、近くにいた働きアリを呼ぶのに腹板腺からの浸出物を使うなど、いろいろである。これらのきわめて特定の意味をもつ化学的メッセージと身体言語とが結びついたものは、いわば「お徳用パック」になっていて、そのなかには、コロニー存続のために一匹のアリが仲間のアリと交換しなければならない必要情報が過不足なく込められている。アリにおいては、言語がその最小限に、すなわち本質的に「フェロモンという言語」に限定されてきた。